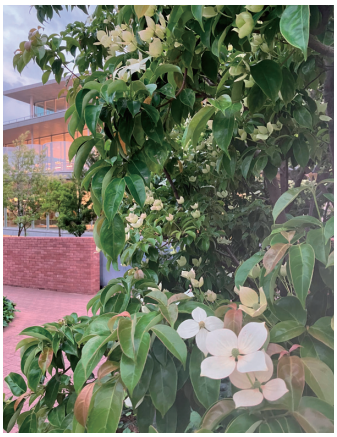
図書館だより

目　次

イタリアの文書館事情　——北村　暁夫　1
著作紹介　和田上貴昭編著『社会的養護』(新・保育シリーズ６)　——和田上貴昭　2
著作紹介　加藤玄著『ジャンヌ・ダルクと百年戦争——時空をこえて語り継がれる乙女』
ゲルト・クルマイヒ著；加藤玄監訳『ジャンヌ・ダルク——預言者・戦士・聖女』
なぜジャンヌ・ダルクは語り継がれるのか　——加藤　玄　3
ケルムスコット・プレス版ジョン・ラスキン著『ゴシックの本質』　——川端　康雄　4
読む，学ぶ，楽しむ。「JWU LibrariE」　——閲覧係　6
ラーニング・サポーター紹介
—ミニ講座「ラーニング・サポーター座談会」を開催して—　——村井あかり　7
図書館からのお知らせ　8



図書館前のヤマボウシ

イタリアの文書館事情

北村　暁夫

歴史研究者にとって，研究の上で最も必要なものは史料である。史料とは，研究対象とする時代について，それと同時代もしくはほぼ同時代に書かれた文章や描かれた図像などのことを指す。対象とするテーマに適した史料を探し出し，それを解読することが歴史研究者の仕事の基本となる。そうした史料を収集する機関が文書館である。ちなみに，世の中的には「ぶんしょかん」と読むのが一般的であろうが，歴史研究者はたいてい「もんじょかん」と読む。

日本にも国立公文書館をはじめ，都道府県の多くが文書館の類を設置しているが，文書館を設けていない県も未だにいくつか存在し，図書館と併設（建物を共有）している県文書館も散見される。また，図書館における司書に相当する専門職としてのアーキビストも，日本では国家資格とされていない。文書館行政において日本がとんでもない後進国であることは，もっと知られてよいだろう。

行政制度においては他のヨーロッパ諸国の後追いをしていることが多いイタリアでも，国家統一から間もない1875年には早くも「公文書館令」という勅令が出され，ローマに中央文書館を設置し，各県の県庁所在地に県ごとの国立文書館を設置することが定められている。県ごとの文書館もすべて独立した建物を持っており，図書館と併設されるといったことはない。日本では，1950年に制定された「図書館法」で，図書館が「図書・記録その他必要な資料の収集」を行うと規定され，ようやく1987年になって「公文書館法」が制定されたことと比べれば，その差は歴然としている。

イタリアの文書館事情は，イタリアが1861年に成立した新しい国で，それ以前はさまざまな国に分かれていたという歴史を反映している。すなわち，ローマにある国立中央文書館はあくまでもイタリア統一以後の公文書の類を所蔵する機関であり，統一以前の公文書は基本的に所蔵していない。統一以前の公文書に関しては，たとえばナポリ王国に関する史料を見たければ，ナポリの国立文書館に行かなければならないのである。他方，ナポリの国立文書館は統一以前のナポリ王国における中央行政の史料を所蔵すると同時に，イタリア統一により首都の地位を失い，一地方自他体となった統一以後のナポリに関する公文書を所蔵しているということになる。

各県庁所在地の国立文書館の中には，歴史的な由来のある建物を利用している事例もある。筆者がかつて何回か通ったトスカーナ州ピサ県（「斜塔」で知られる）の国立文書館もその一つで，16世紀に建設された都市貴族の屋敷を使用している。外見からは４階建てくらいに思えるが，恐ろしく天井の高い建物で，実は２階建てである。文書館のオフィスがある２階まで階段を上るのが苦行であったことが懐かしく思い出される。

（館長・歴史文化学科教授）

著作紹介　和田上貴昭編著『社会的養護』（新・保育シリーズ６）

和田上　貴昭

本書は，保育士を目指す学生が習得すべき「社会的養護」の内容について，国が定める「保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容」に準拠し，体系的に学ぶことができるよう編纂された教科書である。社会的養護とは，保護者のいない児童や，保護者による適切な養育を受けることが困難な児童に対して，公的責任のもとで生活と成長を保障するとともに，養育に困難を抱える家庭への支援を行う仕組みを指す。

この制度は，第二次世界大戦後の戦災孤児の保護を契機として整備されたが，現代においては主に児童虐待を背景とする問題への対応が中心となっている。具体的には，虐待を受けた子どもの保護と養育，自立に向けた支援，さらには家庭への支援を通じて，子どもが安心して成長できる環境を整えることが求められている。乳児院や児童養護施設といった社会的養護の現場では，保育士が子どもの生活に寄り添い，日常的なケアを担っている。したがって，保育士養成課程において社会的養護を学ぶ意義は極めて大きい。

児童虐待という言葉に対して，「特別な家庭で起こる問題であり，自分とは無関係である」と感じる人も少なくない。しかし，子育ての過程において，子どもに対して感情的になったり，強い叱責をしてしまったりする経験は，多くの保護者が少なからず抱えている。虐待はこうした日常の延長線上に位置づけられる側面を持ち，子育ての負担が家庭に集中しやすい現代社会においては，誰もが加害者となり得る可能性を内包している。実際に，児童相談所への虐待通告件数は1990年の統計開始以降増加を続けており，2024年度には約22万件に達している。この数値は，同時期の出生数（約70万人）と比較しても決して小さくなく，児童虐待が社会全体で向き合うべき課題であることを示している。

虐待が子どもに与える影響は深刻である。情緒の不安定さや自己肯定感の低下，対人関係の困難，攻撃性の増大など，心理的・社会的発達に多大な影響を及ぼすことが指摘されている。また，安心して学習に取り組むことができない環境は，学力の低下や進学・就労機会の制約にもつながり，将来にわたって影響が持続する可能性がある。そのため，虐待を受けた子どもに対して適切な養育環境を提供し，信頼関係や愛着の再形成を支援することは極めて重要である。児童養護施設等では，保育士が子どもと生活を共にしながら，安定した人間関係の中で成長を支える役割を担っており，高度な専門性が求められる。

同時に，社会的養護は子どもへの支援にとどまらず，保護者への支援も重要な柱としている。虐待を行った親の多くは，意図的に子どもを傷つけようとしているわけではなく，経済的困難や孤立，精神的ストレスなど複合的な要因の中で適切な養育が困難になっている場合が少なくない。そのため，親を取り巻く環境を改善し，再び家庭で子どもを養育できるよう支援することが求められる。また，虐待の発生を未然に防ぐためには，地域社会全体で子育てを支える仕組みを整え，保護者の孤立を防ぐことが不可欠である。

本書では，このような社会的養護の理念と現状を踏まえ，保育士として求められる実践力を養うことを目的としている。具体的には，現場で想定される事例をもとにした演習問題やコラムを豊富に取り入れ，読者が自ら考え，判断する力を身につけられるよう工夫している。これにより，知識の理解にとどまらず，実践に結びつく学びを促す構成となっている。保育士資格の取得を目指す学生にとって必須の学習書であると同時に，社会的養護の課題や意義について理解を深めたいすべての読者にとって有用な一冊となることを目指している。

（児童学科教授）

2026年４月　学術図書出版社　176頁　＊図書館目白所蔵，請求記号376.108-Hoi-6

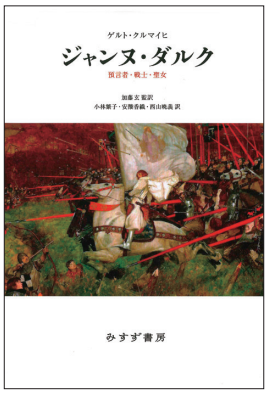
著作紹介　加藤玄著『ジャンヌ・ダルクと百年戦争――時空をこえて語り継がれる乙女』
ゲルト・クルマイヒ著　加藤玄監訳『ジャンヌ・ダルク――預言者・戦士・聖女』

なぜジャンヌ・ダルクは語り継がれるのか

加藤　玄

ジャンヌ・ダルクと聞くと，甲冑をまとい，神の声に導かれてフランスを救った少女を思い浮かべる人が多いかもしれない。映画や小説，漫画やゲームにも登場するため，どこか身近で，よく知っている人物のようにも感じられる。しかし，歴史上のジャンヌ・ダルクとは，実際にはどのような人物だったのだろうか。また，なぜ彼女は，600年近くたった現在も，世界中で語り続けられているのだろうか。

拙著『ジャンヌ・ダルクと百年戦争――時空をこえて語り継がれる乙女』は，そうした疑問について考える手がかりとなることを目指した本である。ジャンヌが登場した15世紀前半のフランスは，イングランドとの長い戦争，王位をめぐる争い，国内の対立によって大きく揺れていた。いわゆる百年戦争のただ中である。本書では，まずその時代背景を整理したうえで，ドンレミ村に生まれた少女が，どのようにして王太子シャルルのもとへ向かい，オルレアン解放やランスでの戴冠に関わることになったのかをたどっている。さらに，彼女が捕らえられ，ルーアンで異端として裁かれた過程，処刑後に名誉が回復される復権裁判，そして後世に聖女・愛国者・英雄として記憶されていく流れも扱った。ジャンヌの「生涯」だけでなく，彼女がどのように「語り継がれてきたか」を考えるための本である。



一方，ゲルト・クルマイヒ著『ジャンヌ・ダルク――預言者・戦士・聖女』は，ジャンヌの人生と時代に，より詳しく迫る本格的な伝記である。私は監訳者として，この本の日本語版に関わった。クルマイヒは，裁判記録や同時代の年代記，書簡などを丁寧に読みながら，ジャンヌを単なる「奇跡の少女」として描くのではなく，15世紀という時代のなかで理解しようとする。彼女が聞いたという「声」，男装，軍事行動，教会との緊張，異端裁判の政治的な意味などが，当時の宗教観，戦争，王権の問題と結びつけて説明されている。そのため本書を読むと，ジャンヌがたしかに特別な人物であったことと同時に，まぎれもなく中世末期の社会に生きた一人の人間であったことも見えてくる。

この二冊は，分量も性格も異なるが，共通している点がある。それは，ジャンヌ・ダルクを「有名な英雄」として眺めるだけでなく，史料にもとづいて考え直そうとしている点である。ジャンヌについては，昔から多くの伝説や解釈が積み重ねられてきた。だからこそ，何が同時代の事実に近いのか，何が後世の人々によって作られたイメージなのかを見分けることが大切になる。

ジャンヌ・ダルクについて知ることは，中世フランスの歴史を知ることにとどまらない。人はなぜ特定の人物を英雄として記憶するのか。社会は過去の人物にどのような意味を託すのか。そうした問いを考えることにもつながっている。図書館でこの二冊を手に取り，まずは関心のあるところから読んでみてほしい。遙か昔の遠い国に生きた一人の少女を通して，歴史を学ぶ面白さを感じてもらえれば幸いである。

（歴史文化学科教授）

（上）2022年３月　山川出版発行　103頁　＊図書館目白所蔵，請求記号209.08-Sek-32
（下）2024年６月　みすず書房発行　321頁　＊図書館目白所蔵，請求記号289.3-Jea

ケルムスコット・プレス版ジョン・ラスキン著『ゴシックの本質』

川端　康雄

ケルムスコット・プレス（以下，KP とも略記する）の書目のなかで同時代の散文による批評文は極めて少ない。モリス自身の著作としては，講演『ゴシック建築』（KP19），『ケルムスコット・プレス設立趣意書』（KP53，シドニー・コッカレルと共著）がある。またD・G・ロセッティの『手と魂』（KP36）も挙げられるかもしれないが，これはむしろ「散文詩」と形容したほうがよさそうだ。その数少ないなかに，今回取り上げるジョン・ラスキン著『ゴシックの本質』がある。これはモリスにとって文字どおり特別な著作だった。書誌データは以下のとおり。

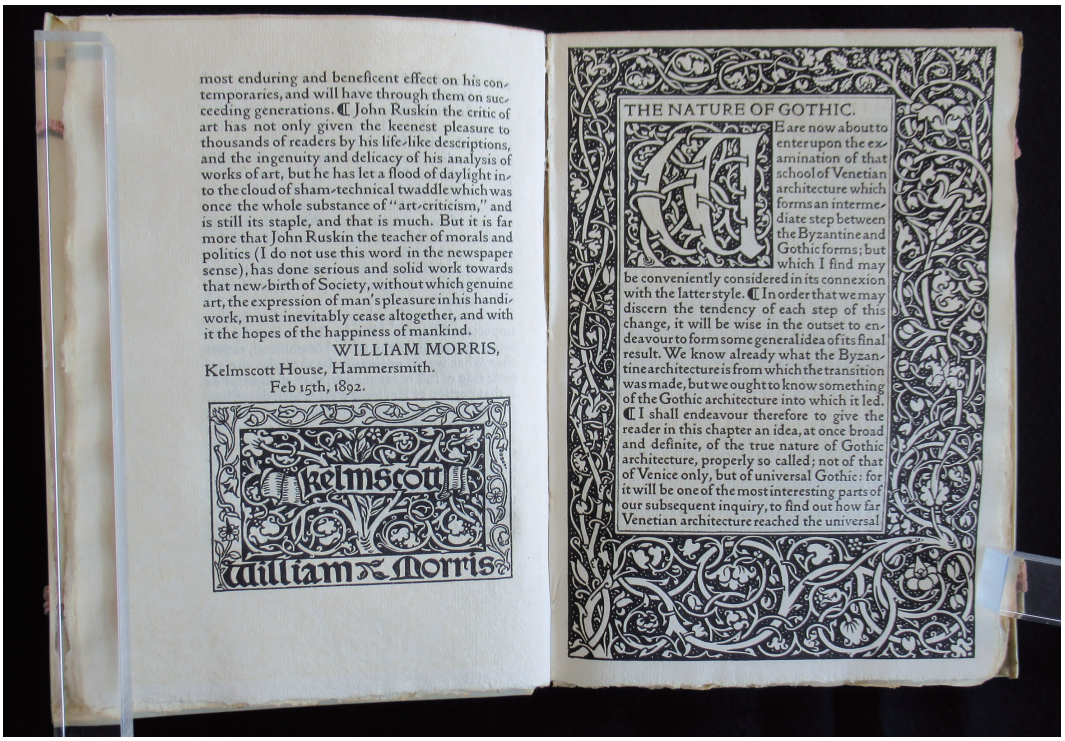
> KP 書目第４番『ゴシックの本質』（*The Nature of Gothic*）ジョン・ラスキン著，ウィリアム・モリス序文。小型４折判，フラワー（１）紙（200×141mm）。136頁。ゴールデン・タイプ。厚ヴェラム装，絹紐付。紙刷本500部（ヴェラム刷本なし）。コロフォン日付なし。ジョージ・アレン社より1892年３月22日発売。価格30シリング。

ラスキンは1819年生まれで，1834年生まれのモリスよりも15歳年長であった。早熟なラスキンは20歳代から美術評論で名を挙げていて，モリスがオクスフォード大学に入学した1853年１月の時点で，すでに『近代画家論』第１，２巻，『建築の七灯』，『ヴェネツィアの石』第１巻などを刊行している。そして入学直後に「ゴシックの本質」の章を含む『ヴェネツィアの石』の続刊が出たのだった。モリスは，大学入学時は聖職者志望だったが，1855年の卒業時には芸術家への道を選んでいた。その進路変更の最大の影響源となった思想家が，ほかでもない，ラスキンその人であり，そのなかで最重要の著作が『ヴェネツィアの石』であり，さらに絞っていうなら，その浩瀚な書物のなかの「ゴシックの本質」と題された第２巻第６章がおそらく決定的だった。

全３巻からなる『ヴェネツィアの石』は，端的に言えば，ヴェネツィアの通時的な建築史であり，その主たる構造材が石材であることからこの題名になっている。だが中身はそう一筋縄ではいかず，その古都の政治史，社会史，文化史的記述も多く含まれる。のみならず，この著作を執筆していたヴィクトリア朝中期のイギリス社会への批判が随所に出てくる。とりわけ，「労働における人間の喜びの表現としての芸術」の理念を示したこの章はモリスに最も深い影響を与えた。KP 版にモリスは序文を寄せていて，そのなかで「もう大分昔のことだが，われわれがこれを最初に読んだとき，これから世界が進むべき新たな道を指し示しているように思えた。そして40年間の失望落胆の事態が多々起こりはしたが，またその後われわれは，とりわけジョン・ラスキンがそうだが，その旅のためにどんな支度が必要であるのか，またその支度を済ます前にいかに多くの事柄を変えねばならぬかを学んできたのではあるが，それでもなお，文明の愚行と堕落から抜け出す道は依然としてラスキンの示してくれた道以外には考えられないのである」と書いている。

この「ゴシックの本質」の章には読みどころがいくつもあるが，産業革命後のイギリスの労働者階級が置かれていた疎外状況について，ラスキンの読者層（主に中流階級）にむけてのアジテーションは大学生だったモリスにダイレクトに響いたに違いない。典型的なくだりを以下に引いておく。

> 最近われわれは分業という文明の偉大なる発明について，大いに研究し，大いにそれを究めてきた 。ただし，この命名は間違っている。じつは分割されているのは労働ではない。人間である。人間が分割されて，単なる人間の断片にされてしまっているのである。砕かれて小さな破片やパン屑のような生命と化しているのである。そのために，人間に残された知性の小片を全部併せても，一本のピンや一本のクギを作ることも満足にできず，ピンの先やクギの頭を作ることで消耗してしまうのだ。〔…〕それに対処する方途はただ一つ，どのようなたぐいの労働が人間にとって好ましく，人間を高め，幸福にするものであるかということをあらゆる階級の者が正しく理解することによってしかない。労働者の堕落によってしか得られぬような便利さとか美しさとか安価さとかを，断固として放棄すること，そして健全で人を高める労働の



most enduring and beneficent effect on his contemporaries, and will have through them on succeeding generations. ¶ John Ruskin the critic of art has not only given the keenest pleasure to thousands of readers by his life-like descriptions, and the ingenuity and delicacy of his analysis of works of art, but he has let a flood of daylight into the cloud of sham-technical twaddle which was once the whole substance of "art-criticism," and is still its staple, and that is much. But it is far more that John Ruskin the teacher of morals and politics (I do not use this word in the newspaper sense), has done serious and solid work towards that new-birth of Society, without which genuine art, the expression of man's pleasure in his handiwork, must inevitably cease altogether, and with it the hopes of the happiness of mankind.

WILLIAM MORRIS,
Kelmscott House, Hammersmith.
Feb 15th, 1892.

Kelmscott
William Morris

THE NATURE OF GOTHIC.

WE are now about to enter upon the examination of that school of Venetian architecture which forms an intermediate step between the Byzantine and Gothic forms; but which I find may be conveniently considered in its connexion with the latter style. ¶ In order that we may discern the tendency of each step of this change, it will be wise in the outset to endeavour to form some general idea of its final result. We know already what the Byzantine architecture is from which the transition was made, but we ought to know something of the Gothic architecture into which it led. ¶ I shall endeavour therefore to give the reader in this chapter an idea, at once broad and definite, of the true nature of Gothic architecture, properly so called; not of that of Venice only, but of universal Gothic: for it will be one of the most interesting parts of our subsequent inquiry, to find out how far Venetian architecture reached the universal

ジョン・ラスキン著『ゴシックの本質』（ケルムスコット・プレス，1892年）v–１頁　活字（ゴールデン・タイプ），印刷所標章，縁飾り，装飾頭文字のデザインはモリスの手になる（所蔵：日本女子大学図書館）

産物と成果とを，おなじく断固たる態度で要求することによってしかない。

ラスキンはヴィクトリア朝時代のイギリスの最重要の美術批評家と目されていたから当然であるが，主要著作が何度も版を重ねていたのみならず，廉価な普及版が多く出されていた。とくに彼が1850年代半ばに労働者大学で素描を教えていたときに生徒だったジョージ・アレン（1832–1907）に声をかけて，1871年に出版社を立ち上げさせて以後，それがラスキン専属の出版社となり，初期の著作の再版も手掛けていった。その点でアレンは，ヴィクトリア朝後期から20世紀初頭にかけてラスキンを広い読者層に普及させた貢献者であったと言えるが，彼が印刷した本の体裁，および使用活字は，当時のイギリスの商業印刷と変わらず，凡庸だった。アレン社以前の版についても，大判の用紙に小さな活字を用いて刷られた刊本は，装丁が堅牢であっても，読みやすいとは到底言えない。モリスがそれらに不満であったことは，1891年の新聞インタビューで明らかにされている。近代以降，イギリスの印刷業界で用いられる活字がいかに劣悪なものになったかを指摘してモリスは，「わが国屈指の著述家の本でさえ，活字のせいで台無しになっています。ラスキン氏の著作をご覧なさい。英語の本のなかでもおよそ最悪の印刷で，最も醜い代物ですから」と述べている。すると記者から「『ヴェネツィアの石』の一部を印刷することで，その欠陥の埋め合わせをなさるおつもりですね」と問われ，「ええ，その一章分だけ。『ゴシックの本質』の章で，それはじつはその著作全体の核心部分に当たります。ラスキンはそこで建築について言うべきことのすべてを要約しているのです」と答えている（『ペル・メル・ガゼット』1891年11月12日）。

本文の底本はジョージ・アレン社1886年版に拠る。KP 版での印刷をアレンは喜んで許可した。当時助手を務めたシドニー・コッカレルの記録によれば，本書の企画はコッカレルがモリスに勧めたことで，序文も彼の発案だったという。だとすると，コッカレルのおかげで，モリスの貴重な（まとまったものとしては唯一の）ラスキン論がここに残されたことになる。　（文学部名誉教授）

読む，学ぶ，楽しむ。「JWU LibrariE」

JASMINE アカウントを持つ本学学生向けの電子図書館サービス「JWU LibrariE（ライブラリエ）」はもうご利用になりましたか？ ここでは「JWU LibrariE」の魅力をお伝えします。すき間時間を，ぜひ“読む・学ぶ・楽しむ”に。

📖 気軽に読めるラインナップ

軽読書，小説，実用書，教養書などを多数購入
今人気のタイトルはこちら！

- 『１日１ページ，読むだけで身につく　世界の教養365』
- 『わたしの「ひとり暮らし」ルール』
- 『つい誰かに話したくなる日本の教養・雑学大全』

⏰ 返却忘れの心配なし！

- 貸出期間：1冊１週間
- 期日を過ぎると自動返却
- 図書館の紙の図書とは別枠で利用 OK

📱 スマホ・タブレット対応

- 文字が見やすく，操作も簡単
- 音声読み上げ機能付きの図書もあり

👧 学生の興味が反映されています！

年２回の学生投票で購入図書を決定！
毎年図書のテーマを設定しています

📚 簡単投票！

図書館エントランス・スロープでシールを貼ろう！
【2026年度前期投票終了】
※選ばれた図書は ７月７日（火）より利用可能
＜テーマ＞
戦国時代・戦国武将 / 世界各地で活躍した女性の歩み / 接客業に学ぶ / イタリアに親しもう！
【2026年度後期投票】
　９月16日（水）～10月14日（水）

💻 利用方法

図書館 HP ＞ データベース ＞
JWU LibrariE ＞ JASMINE アカウント
入力

QR コードはこちら

（図書館・閲覧係）

ラーニング・サポーター紹介
―ミニ講座「ラーニング・サポーター座談会」を開催して―

村井あかり

図書館の入退館ゲートをまっすぐ進んだところに，JWU ラーニング・コモンズさくらはある。JWU ラーニング・コモンズさくらでは，可動式机・イスやホワイトボード，貸出機器類を備えており，それらを自由に使って様々な学修活動を行うことが可能である。また，学科や専攻の推薦を受けた本学学生のラーニング・サポーターに，授業やレポートなどに関する学修相談をすることもできる。

ラーニング・サポーターは学修相談のほかに，本学学生を対象とした「ミニ講座」という講座を前期と後期に一人１回ずつ開催している。『実際どうなの？海外短期研修のすすめ』や『教職履修，実際どんな感じ？』など，これまでにたくさんの講座が行われた。タイトルからも分かるように，ラーニング・サポーターそれぞれが，自身が経験してきたことや身に付けた知識を生かし，学生の皆さんにとって役立つことは何か？と考えながら講座の企画を練っている。私の場合は，日ごろの学修相談がヒントになることが多い。「書式がどうやってもずれてしまう…」や「資料はどうやって管理しているか？」などの相談を受けた経験から，PC スキルに関する講座を実施したこともあった。学修相談は学生の「困りごと」を知る機会でもある。

今回の講座の企画も院生からの学修相談がきっかけだった。主に研究の進め方に関する相談だったが，途中で「自分だけ研究が進んでいないように思えて不安になる」と相談者の方が言った。「そんなことはないですよ」と言えばよかったのかもしれないが，何も知らない私の発言で不安が解消されるわけがない。ただ，その不安は同じ院生である私自身にも覚えがあった。相談者の方には，その気持ちはよく分かること，ゼミや学会で発表して他人からコメントをもらうだけでも心もちが違うことなどを話した。でも話しながら，不安なとき院生たちはどうしているのか，私だって知りたいよと思った。力が足りていない私は，時間を費やしても研究を一からやり直す～なんてこともしょっちゅうであり，進捗は遅いし出来栄えもよくない。常に研究内容が頭にちらついてしまうのに，研究に没頭しているとは言い難く，そのくせ研究とは関係ないことをしていると「今これをやってる場合なのかな」と自分の行動に罪悪感が伴う。こんな負のループ，真面目にやっている人ならあり得ないことなのかもしれない。それでも他の院生たちと話してみたいと思った。

ラーニング・サポーターは様々な専攻・学年で構成されている。いろいろな立場のラーニング・サポーターたちが集まって話をすることで，関係性が希薄になりがちな院生の生活や研究についての情報交換ができないか。そこで企画したのが2026年３月に実施した「ラーニング・サポーター座談会～大学院よもやま話～」である。当日は大学院に関するいくつかのテーマを設け，ラーニング・サポーターがそれぞれ自身の体験や考えを話した。例えば，「進学や研究のきっかけ」や「進学してよかったこと」，「研究の息抜きやモチベーションの保ち方」などである。テーマから派生して別の話題へと話が広がっていくこともあり，参加してくださった方にとって，座談会形式ならではの有意義な時間となっていたら幸いである。

個人的には，研究にはどうしても苦しい瞬間はあるよねという気持ちを，同じ院生であるラーニング・サポーターたちと共有できたことが何より嬉しかった。そして，苦しい中でも，それぞれが院での生活に自分なりの楽しさを見出していることが同時に分かり，私も自分が研究をしたいと思った原点を改めて思い出せた気がした。今回集まってくれたラーニング・サポーターたちは，専門分野もバラバラ，研究室の様子も異なるけれど，誰かに話して体験や気持ちを共有することの良さを再確認した。研究に限らず，学修のことで誰かに話をしたくなったらぜひラーニング・サポーターをたずねてみてほしい。

（2025年度ラーニング・サポーター）

図書館からのお知らせ

図書館の動きを皆様にお知らせし，一層ご活用いただけるよう，2025年度の主な取り組みをご紹介します。今後もさらなるサービス向上に向け，取り組んでまいります。

○ 概況

日本文学科所蔵の古典籍42点（19タイトル）を，国文学研究資料館の「古典籍デジタル化プロジェクト」によりデジタル化して公開することが決まり，2022年，業者による撮影が行われた。撮影後，資料は図書館に移管され，現在は貴重書室に保管されている。６月，この画像が「国書データベース」で公開された。2026年には更に，日本語日本文学科と図書館が所蔵する貴重書のデジタル化について計画を進めている。

１月，システム課により図書館 HP のリニューアルが行われた。スマートフォンでも見やすいレスポンシブデザインを実現している。また，学認への参加により学外からデータベース等にアクセスする方法が増えた。

卒業生グループおよび学外からの見学は183件の申し込みを受け付け，来館者は1000人を超える（入学課引率による高校生の見学を含まない）。全体としては昨年度（192件）より微減だが，海外からの来訪は64件から78件に増加した。韓国からが最多で，台湾，中国，マレーシア，スロベニア，クロアチア，スペイン，アメリカ，イタリアなど幅広い地域からの見学者があった。

2025年度実施した利用者向け講習会

１年次オリエンテーション

遠隔（動画を作成し LMS にて公開）による実施

教員からの依頼等により授業時間内に実施

計45回753名参加

児童４回29名，　食物２回12名，
被服３回25名，　家政経済１回９名，
日文６回140名，英文13回187名，
史学４回86名，　社会福祉６回104名，
教育１回24名，文化／国際文化４回111名，
心理１回26名。
この他，１学科にテキストを提供した。

図書館主催で実施

・新大学院生オリエンテーション
　→図書館 HP にスライドを掲載

○学術情報リポジトリ

2025年度の登録数は205件，前年度比でダウンロード数が約1.4倍と増加している。

○電子図書館 LibrariE（ライブラリエ）を利用した学生選書

ライブラリエはタブレットやスマートフォン，PC 等で一定期間「借りて読む」ことができる学生向け電子書籍サービスである。2022年度後期より学生入館者の投票により購入タイトルを決めており，2025年度前期は４つのテーマに対して272票の投票があり，46タイトルを購入した。後期も４つのテーマに対して128票の投票が寄せられ，41タイトルを購入している。

○文学部学生によるブックハンティング実施

文学部（2026年４月に２つの学科の名称を変更）の主催で，８月１日，紀伊国屋書店新宿本店にて学生によるブックハンティングを行った。図書館に入れてほしい図書を店内の120万冊から選ぶという企画である。当日は選書の後，学生が選んだ図書の POP を作成し，紀伊国屋書店と図書館で展示が行われた。

○ラーニング・コモンズさくらの活動

各専攻からの推薦を受けた延べ７名のラーニング・サポーターが活動し，レポートの書き方や大学院進学の相談など49件の相談を受け付けた。ラーニング・サポーターによるオンラインミニ講座も計６回開催，179人が視聴した。

編集後記　本日６月３日，台風６号の影響により図書館は終日閉館となった。まだ梅雨入りもしない６月初めの台風の到来で館内には思いがけぬ静寂が訪れている。明日はいつもどおり，学生の皆さんが颯爽と来館し，それぞれの自由な時間をお気に入りの場所で心ゆくまで過ごしていただける日常が戻るだろう。この場所が平和であることの尊さと世界の不穏に思いを馳せる。（水嶋）　2026年度編集委員：水嶋寿恵，鈴木学，南木香織

日本女子大学図書館だより　No.186　2026.6.25　　ホームページ https://lib.jwu.ac.jp/lib/LP.html
日本女子大学図書館発行　〒112-8681　東京都文京区目白台２丁目８番１号　☎（03）5981-3195